ふへと、見えたつながり -LINK SAYAMA-

P4 LINK1 お店を通してつながる
P6 LINK2 学び合ってつながる
P8 LINK3 ひと房からつながる
P10 LINK4 伝えてつながる
P12 LINK5 若い世代がつなげる
P14 LINK6 ここからつながる
P15 LINK7 つながりを生み出す

自分の住むまちのこと、どれくらい知っていますか。
どれくらい、好きですか。
そして、どのくらい「つながり」を感じていますか。
そんな問いにどれくらい自信を持って答えられるだろう。
まちで人気のお店を営む、あの人なら。
イベントで楽しそうに活動する、あの人なら。
ずっとこのまちで暮らしてきた、あの家族なら。
きっと、胸を張って答えられるのかもしれない。
「つながり」って、特別な人だけのものだろうか。

狭山市では、5年連続で人口の社*会増が続いています。
その中には、若い世代の転入者も多く見られます。
仕事、結婚、子育て。
一度市外へ出て、戻ってきた人もいる。
狭山に来た理由も、ここで過ごしてきた時間も人それぞれ。
それでも今、私たちは同じまちで暮らしています。
まちとの関わりというと、何か特別なことをする姿を
思い浮かべるかもしれません。
けれど、
好きなお店を見つける。
こどもと一緒にいつもの公園へ行く。
「こんにちは」と言い合える人ができる。

近所のイベントへ出かけてみる。
お気に入りの場所を、誰かに伝える。
そんな何気ない毎日の、一つ一つの行動が
まちとの「つながり」だとしたら。

人と人。人と場所。人とまち。——もっとまちが好きになる。
そんなつながりに目を向ける合言葉、
「LINK SAYAMA（リンク サヤマ）」。
この特集では、「まちとのつながり」に目を向けて
このまちを「私のまち」と思ってもらうため、
狭山とつながる人たちを訪ねました。

*転入者が転出者を上回ることで生じる人口の増加



撮影場所：昭代橋



ラ・ミラベル シェフ 岡村 薫さん

市内のベーカリー「ラ・ミラベル」（中央4丁目）のシェフ兼オーナー。お店の営業は週3日ほど。本業は農業用ドローンの販売・整備。

自分にとっての「帰ってくる場所」

生まれは都内ですが、小学生のころから狭山に住んでいます。大学を卒業して就職し、3年目に大阪へ転勤となりました。それ以降は仕事の関係で、アメリカや日本各地へ引っ越しをしています。ある時会社を辞め、フランスで5年間パン作りなどを学んできました。「フランス国立製パン製菓学校」という国内でもトップクラスの国立学校に通い、パンやケーキ、お菓子作りなどに関連するフランスの国家資格を5つ取得しています。

経歴を見た人に「都内にお店を出すことは考えなかったんですか？」とよく聞かれますが、帰国して狭山以外にお店を出すことは考えていなかったです。良い材料を使用して質の高いものを提供するために、固定費を抑えて材料費に回したいと思っていました。フランスでの学びを生かし、現地で使用していた材料と同じものを使用して妥協せずに作りたい。そして何より、自分にとっては狭山が「帰ってくる場所」でした。


昔の狭山や家族の思い出を話す岡村さん

土地がつなぐ、出会いと縁

妻と出会ったのも、このお店です。よくパンを買いに来てくれていて、良さそうな人だな、と思って少しずつ仲良くなっていったのがなれ初めです（「近所に住んでいて、なんか変なお店だけどおいしいから仕方なく通ってました」と笑いながら話す妻の尚子さん）。私は富士見小学校の第1期生で、父が保護者としてグラウンドを耕したり地ならししたりしていました。実は妻やこどもたちを含め、家族全員が富士見小なんです。だからドライブに出かけたときに家族全員で校歌を歌ったりね。狭山は災害が少なく暮らしやすいので、親戚にも薦めて今では5軒くらいが市内に集まっているんですよ。


妥協せず作るこだわりのパンには大勢のファンが

まちに育まれ、まちを育む

「狭山の人」であることはアイデンティティであって、特に意識していたわけではないけれど、入間川七夕まつりにこどもと行って飾りや花火を見上げたり、入間航空祭の日に外に出てブルーインパルスを見たり、そうして過ごしていると狭山の人間だなと思います。先日、娘が学校で茶揉み体験をして、帰ってきてからうれしそうに「私が作ったんだ」と話してくれましてね。「お茶を入れるのはご飯の時がいい？後がいい？」と聞いてくれて、こういう体験は狭山ならではだと思います。

ここは身近に多くの公園があり、川沿いでのお散歩もできる。私もこどもや犬と一緒に智光山公園や入間川にこにこテラスに遊びに行っています。都心へのアクセスも良いので、こどもを大学に通わせやすいし、落ち着いた生活を送ることができて、子育てには最高のまちだと思いますね。安心して子育てができ、老後まで住める場所だと思っているので、子育てを考えている夫婦にはお薦めしたいです。私自身がこれからこのまちでやってみたいことは、まちの空き家を生かして、一人暮らしやひとり親家庭の方が一緒に暮らせるシェアハウスを経営してみたいなと考えています。不動産を通じて社会貢献をしていきたいし、まちづくりに少しずつ携わりたいという気持ちです。


休日は入間川周辺や公園で家族団らん

まちとのつながりを感じる時

地域の人がたくさんお店に来てくださるので、パンを買いに来てくださったお客さんと会話をしているときですね

狭山　市子ども会育成会連絡協議会

ジュニアリーダー＆ユースリーダー



ジュニアリーダー

子ども会の活動の中で、こどもたちへ指導や助言を行う主に中学生・高校生のリーダーのこと。スポーツやキャンプ、レクリエーションゲームなどの知識や技術を学び、こどもたちの気持ちに寄り添いながら、仲間作りや参加者の主体的な活動を促して子ども会活動や地域の行事を導きます。

ジュニアリーダーになるためには、狭山市子ども会育成会連絡協議会と市教育委員会が毎年開講しているジュニアリーダー初級講習会に参加し、必要な知識や技術を学びます。活動時には、リーダーネームを使用。

ユースリーダー

18～30歳までの青年で、子ども会活動の指導と助言に当たる人。



8月には巨大すごろくを企画



県の上級資格認定研修会を修了

始めたきっかけ



あっきーな 以前住んでいた宮城県で姉（つかぽん）が参加している姿を見ていました。自分も、学校以外で地域とつながる機会や人と関われる機会が欲しいと思ったのがきっかけです。

なり 小学5年生の時に講習会の案内が来て、学校以外のところで友達を作りたいと思って参加しました。

大学生まで続けられた理由

つかぽん 狭山で参加し始めた時は中学生で、高校生になっても続けていた。当時はそれが珍しかったですね。中学で辞めてしまう子が多い中で、下の子たちが先を見据えて「中学生になったらこんなことがしたい」「高校生になっても活動を続けたい」と考えているのが見えた時に「もっとみんなの活動の場を広げてあげたい」と思い、大学生で県のユースリーダーになりました。

やりがいを感じる時

あっきーな 長く続けてくれている年下の子たちが中学生に進級するのを見たり、高校受験を見届けたりすると、自分も一緒に成長している気持ちになります。これは学校だけでは絶対に経験できないことだと思って、うれしさを感じます。それから「つかぽんの妹」ではなく一人の「あっきーな」として評価された時ですかね。

印象に残っていること

てる 広瀬児童館のイベントで、紙皿のサンバイザー作りとかバルーンアートのブースを出した時のことです。知らない大人もいる場所で緊張していた中、みんなにすごく優しくしてもらい、大人たちの温かさというのを知りました。小さいこどもたちを怖がらせないか、上手くコミュニケーションが取れるか心配していましたが、大成功。保護者の方にも「ありがとう」と言ってもらえてすごく良い経験でした。これを糧に違う活動もしていきたいって思いましたね。

ジュニアリーダーになり「まち」に思うこと

つかぽん 引っ越しが多かったので、ふるさと意識みたいなものにずっと疑問があったんです。活動を始めてからは自分が狭山市に所属しているっていう感覚が強くなりました。県での活動に参加すると「狭山市のつかぽん」になれる。こういう帰属意識はジュニアリーダーになったからこそ。それに気付けたことって大きいなと思っています。戻ってこられる場所があるって大切なことだと思うから、この感覚はみんなにも広がってほしい。だからこそ子ども会活動やジュニアリーダーをもっと知ってもらいたいです。

あなたにとってのジュニアリーダーとは

りゅうあ 今は下の子のサポートをすることが多いけど、小さい子は話し合いの中で僕が気付かなかった意見とかを出してくれる。周りの人と協力したり行動したりすることって、結局は自分自身の成長につながってるなって思います。それから、この活動がなければ関わらなかったであろう人たちと仲良くなれました。話してみたら同じ趣味があったり面白い人だったり、普段の友達とは違うタイプの人と関われるのって良いなと思うし、そういう貴重な機会をくれるのが自分にとってのジュニアリーダーです。



ジュニアリーダーを通して感じる人とのつながり

なり 活動の時に他のみんなから教えてもらった流行（はや）りものとかレクとかを、別のコミュニティで今度は自分が伝えられる実感があって。人と人とのつながりでいろいろなものがこういう風に広まっていくんだなって思うと、つながりってすごいし、知識を広げていくことを助けるものでもあるとしみじみ思います。

狭山の好きなところ・場所

てる 小・中学生時代に友達とずっとサッカーをしてた狭山元気プラザ　**なり** 入間川七夕まつりとその時のまちの雰囲気。ずっと続いてほしい、ジュニアリーダーでも出店したい　**つかぽん** 毎日通るエミパーク狭山稲荷山。季節の移り変わりをここで感じるスマホのアルバムに撮りためてる　**りゅうあ** 行きつけのラーメン屋さん。友達と「とりあえずあそこ集合で」ってなる　**あっきーな** 帰り道の昭代橋とそこから見える夕日。













宮信観光ぶどう園　園主
山添　智昭さん

ブドウ狩りができる「宮信観光ぶどう園」（水野）の園主。ブドウの他、梨も販売している。昨年の1月に先代から園を引き継ぎ、今シーズンで2年目となる。

今ここにつながるこれまで

大学を卒業してからは20年ほど会社員をしていました。転勤で大阪や京都、宮城などいろいろなところに暮らしたことがあります。退職して、スタートアップ企業の立ち上げに携わった後、個人事業主としてしばらく働いていました。50歳になる前、できる限り長く働ける仕事をしたいと思い、農業を考えるようになりました。

初めは、働きながら農業の勉強をするために、所沢のネギ農家さんで週3日ほどのアルバイトをしていました。その農家さんと、当園の先代が知り合いだったことから「後継者を探している」と聞き、ご縁があって今に至るという感じです。

「居心地の良さ」と「おいしさ」を提供

自分の代になりホームページをリニューアルしました。観光ブドウ園として遠方のお客さんにもお越しいただくため、安心して来園してもらえるような情報発信の仕方を心掛けています。

農園ではゆっくり過ごしてほしいというのを一番に考えています。開園は残暑の季節ですが、ブドウ棚の下は涼しいし、ゴザを敷いてのんびりと楽しんでいただきたいですね。

比べて気付くこのまちの個性

狭山は、暮らしていくのに一番良いところだと思っています。スーパーの選択肢が多いですし、電車が2路線走っているのも便利ですね。夜になると、ちょっとした田舎より星がきれいに見えるのが魅力的です。空が抜けていて空気が澄んでいるのだと思います。堀兼のサトイモ畑の風景は、大きな葉っぱがバーっと並んでいるのが爽快で好きです。観光地化されていないので、まちの個性が生きていると感じていて。あとは自分が今まで見てきた地域と比べて、お祭りやお囃子、獅子舞などがとても独特。音にグルーヴ感があり、動きが激しかったりする。自分から見ると不思議で面白いです。狭山の良さって、じっくり見てみないと分からないですよって言いたいです。園にいると近くのお茶屋さんからお茶の香りが漂ってきて、そういうのが、すごく良いなぁって思いますね。

季節ごとにお客さんの笑顔を

狭山には昔、ブドウ園が数十軒あったと聞きました。今ブドウ組合に登録しているのは6園ですが、この辺りの地域では、ここまで市内に固まっているのは珍しいんです。都心の近くで、ブドウ園がしっかりと地域的にあるのはここくらいだと思いますよ。同じ市内でも場所が変わると土が変わるので、皆さんそれぞれ個性のあるものを作っています。全然雰囲気が違いますね。うちはブドウの他に梨も販売しています。直売の営業期間は1カ月強、ブドウ狩りは2～3週間なので「やっている期間が短い」「予約が取れない」などの問い合わせをいただくことが多いです。そこを解決していくため、他の果物も増やしていきたいと考えています。単純な発想ですが、スーパーのようにいつ行っても果物が買えるような場所があるとお客さんは喜んでくれるかな、と思うんです。今の時期は何があるかな、と立ち寄れる場所が近くにあるときっと楽しいですよね。



そのためにうちは時間無制限の食べ放題。あとは、できるだけ「これは取らないで」「そこは行かないで」というような注意をしないようにしています。嫌な気持ちになることなく居心地良く過ごしてほしいので、許容できることは許容するスタンスです。また、多くのお客さんを受け入れる農園として地元の方に迷惑をかけないことも意識しています。

お金を払って来ていただくので、ブドウについても、先代と一緒に「昨年より頑張ろう」という気持ちで精一杯作っています。一番うれしいのはお客さんの「おいしかった」の一言。地元の方は枕詞がついて「今年もおいしかった」と言ってくださいます。

まちとのつながりを感じる時

ブドウ園にいる時です。近頃は地域のお祭りも、園を会場にして行うことがあります。まちの農家さんと話している時もつながりを感じます

記事が公開されるまで



02
電話などで取材を依頼



01
取材先や内容を決める



03
いざ取材へ！投稿用の写真を撮影



04
取材相手のお話をしっかりと聴きます



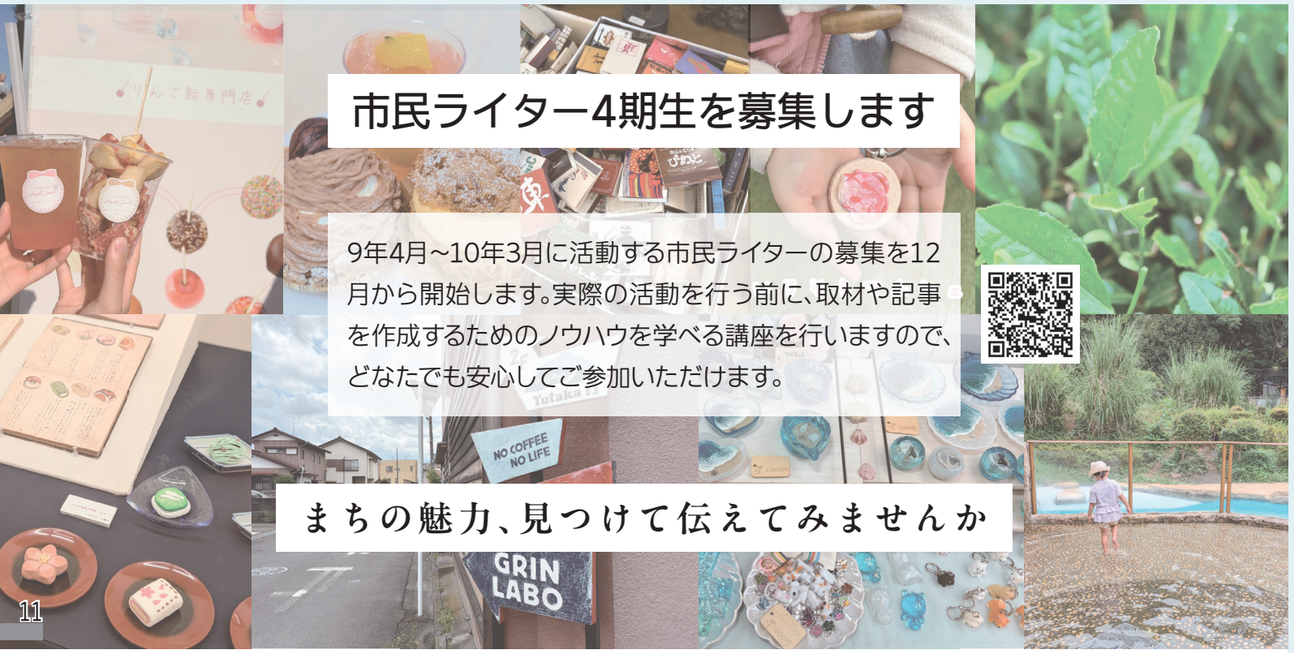
06
広報課を通して投稿します



05
伝わりやすい言葉を練りながら記事を作成

※こちらは一例で、投稿の種類によっては取材が不要なものもあります

撮影協力：Vanitoy Bagel（バニトイ ベーグル）狭山店、かよこのやさい



市民ライター4期生を募集します

9年4月～10年3月に活動する市民ライターの募集を12月から開始します。実際の活動を行う前に、取材や記事を作成するためのノウハウを学べる講座を行いますので、どなたでも安心してご参加いただけます。

まちの魅力、見つけて伝えてみませんか



さやまちょこっとなびとは

市民の皆さんの目線から、イベントやお店情報などをInstagram（インスタグラム）で発信している「さやまちょこっとなび」（略称：さやちょこ）。狭山で生活する市民ライターの皆さんが、取材と記事作りを担当しています。この取り組みも今年で3年目を迎えました。狭山の魅力を見つける喜びと、伝える楽しさ。さやちょこを通して、色とりどりのまちのきらめきをぜひ皆さんもご覧ください。

SAYACHOCONAVI



エリーゼさん

ベルギー出身です。引っ越してきたばかりで、新しい発見がたくさんあり楽しいです。外国人ならではの視点で狭山の良さを発信していけたらと思っています！

3期生
夫婦で市民ライターとして活躍中







ひろさん

生まれは仙台、育ちは所沢です。昨年引っ越してきたばかりですが、自然の豊かさや暮らしやすさに驚いています！地域の農産物に興味があり、狭山茶が好きです！狭山の魅力を精一杯お伝えしていきたいです。

■狭山で見つけたお気に入りの場所

お互い自転車が好きなので河川敷のサイクリングロードが好きです。犬の散歩や外国の方などいろいろな方がいて居心地が良いですね。家の近くにある田んぼ沿いの道は、季節によって景色が変わり、ジョギングとお散歩の時に気持ちが良い。公園ではフリスビーやバドミントン、キャンプ用の椅子を持って読書することもあります。それから、市民農園を利用できることになったので、野菜作りを始めるのが楽しみです。

■さやちょこの活動で印象に残っていること

最初の市民ライター講座がすごく楽しかったですね。当時中学生だった方と同じグループになった時に英語が通じて、驚いたのとうれしかったのを覚えています。さやちょこのメンバーが集まると、それぞれ違うところがあってとても面白いです。性別も年齢も行く場所も言葉遣いも違うので、記事にも個性が出ていて、他の方の投稿を見るのも2人で楽しみにしています。

■まちとのつながりを感じる時

近所の人とあいさつをする時です。私たちはよく家のベランダに出て食事をするのですが、「良い雰囲気ですね」みたいに軽く声をかけてもらって、そういうのが良いなって思います。

以前、狭山茶の関係で奥富園さんを取材した後に妻の家族がベルギーから遊びに来たことがありました。日本茶に興味があったので、お世話になった奥富園へ。とても忙しい日だったにも関わらず、奥富さんが「時間ができたら話しましょう」と親切に言ってくださってうれしかったです。さやちょこを通してできたつながりですね。



対談 まちと僕ら

まちをにぎわす若者たち。いつから、どんな思いでまちに関わるようになったのでしょうか。初対面のメンバーもいる中、等身大の言葉でそれぞれの思いを語り合いました。

――まちのことに関わり始めたきっかけは

安達　大学の授業で市内のお茶屋さんである宮野園の宮野さんが講演してくださり、すごく楽しそうに狭山のことを話すのを見て「こんなに楽しそうな大人っているんだ！」と思ったのがきっかけです。狭山のことをもっと知りたいと宮野さんに話しかけたら世界を広げてもらえて、人生が豊かになった感じがしました。

松浦　中学生のときに地域のボランティアへ参加したことです。もっとまちに関わりたいという思いがあって、高校への進学を機に、自分でまちに関わるための団体を作りました。同級生のみんなも「面白そうなことやろうとしてるね」って賛同してくれた感じです。

松田　以前は自分のまちが嫌いで、海外で活躍する人間になりたかったんです。でも、どこに行っても「お前のホームタウンはどこだ」って聞かれて、その度に「自分は狭山から来たぞ」って誇りを持って言えない自分が悔しかった。胸を張って言えるようになりたいと思っていて。市の職員だった時に、職員がまちに関わっていくことがテーマのワーキンググループに参加して、まちに踏み出すための機会とタイミングをもらうことができました。

――活動していて、好きな瞬間ややっていて良かったと思うことは

松田　自分の企画でみんなが喜んでくれるのはもちろん、自分と関わりのないところで「私、狭山が好きなんだよね」と言ってる瞬間を目の当たりにすると泣けてくるようなうれしさです。自分が10代の頃に「地元が好き」って一度も言えなかったから、言える人を見ると喜びとやりがいを感じますね。

松浦　地域のイベントなどで皆さんの楽しんでる姿や笑顔を見られると、良いなって思います。友達にも「来てみたらすごく楽しくて、来て良かったな」と言って帰ってもらえる。そういう場作りに少しでも貢献できること、仲間になれたなって思えることがうれしい。

市橋　地域にのめり込んで「うわ～良かった」ってすごく思った瞬間は、成美と2人でキッチンカーのイベントに学生として参加させてもらって、やってみたいと思ったことが実現できた時です。その姿を見た大学の後輩が「自分たちもやってみたい」と声をあげてくれて、私たちの楽しさが伝わって誰かの「やってみたい」につながった瞬間というのが、私でも何か影響を与えることができるんだと思えた大きな出来事でした。

――一歩踏み出してみることへの不安はありませんでしたか？

市橋　初めてのイベントで、お金が関わることに不安はありました。でも、悩んでいる私たちを見て助けてくれる大人たちがたくさんいて、導かれながらやり遂げることができました。

松田　大人側も敷居を低くしてラフにコミュニケーションを取ってくれたら良いなと思うし、実際狭山にはそういう大人が多いと感じています。

――まちに関わる中で変化を感じたことは

松田　まちでご飯を食べるのが楽しい。知っている人が増えて、声をかけられることが多くなったし、自分にとって静かだったまちが随分とにぎやかになった。おいしいお店を聞かれた時に、その人に合ったお薦めを教えてあげられる自分になったのも、幸福度が高くなったことの一つかも。

安達　まちの中で、年代に関係なく「やっほー」って気軽に声をかけられるような関係性がたくさん溢れていることが、私にとって小さな幸せの積み重ねになっています。いろいろな人と関わる機会ができて、目の前のこの人はどんな瞬間に感情が揺れるんだろうって想像できるようになった。一見関わりがないようだけど、相手の感情に考えを及ばせるのは今のお仕事にも生かされています。

市橋　私は逆に仕事を通して狭山を見る目が変わりました。イベントなどで活動しているときには、ある程度の決まった場所しか見ていなかったと思うんです。それが、営業として市内全域を回るようになって、見たことが無い場所に行ったり、地域によって抱えてる問題の違いを知ったりして、視野が大きく広がりました。

――今後の狭山と自分のこと

松浦　市内の小・中学生に向けて何かやりたいと思っています。他にも、中・高生を集めて座談会みたいなことも。小さくても、さまざまな世代の人を巻き込んで、こどもや同世代向けの活動をしていきたいですね。

松田　まちに関わるって、思っているほど敷居は高くないと思うんです。「あのお店の○○がうまい」とか「この景色が好き」とか、地元の何かをちょっと好きになるだけでいい。それを自分で思うだけでも最高だし、友人や家族にシェアできたらもっと最高です。そんなきっかけを生むために、町ガチャ*やイベントをもっとユニークな形で考えていきたいし、地元の誇りである狭山茶を市外や国外へ届ける企画も、さらに仕掛けていきたいですね。

市橋　私たちは本当に狭山と、まちの人たちが大好きで、この気持ちの中身って至る所に知り合いがいるのが大きいかなと思っていて。まちのあちこちで「こんにちは」って言える関係性があったら、元々狭山に馴染みのない人でも「なんだか居心地が良いな」って思うんじゃないのかな。それから、知りたいことが知れるとか、買いたいものが買えるとか、その人にとっての自己実現が叶えられる場所には自然と愛着が湧くと思っています。今、何かを知りたいと広報紙を手に取ってくださった読み手の方がいるとして、そのこと自体も小さな自己実現で、まちとのつながりだと私は思います。

*市内のお店で特典が得られるチケットが入った市内回遊カプセルトイ



狭山に貢献する学生の会
松浦 燈吾（とうご）さん
今年の4月に市内で同会を立ち上げた高校1年生。主にボランティア活動などを行う。
狭山の好きなところ／堀兼のサトイモ畑



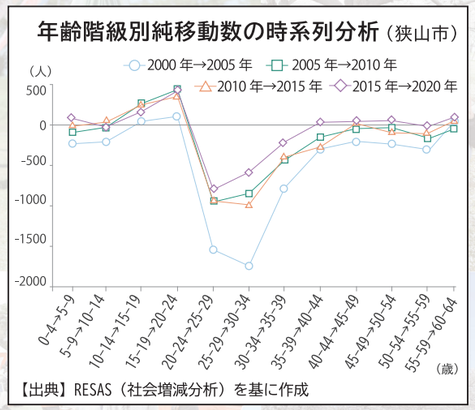
狭山の沸かし屋
松田 陸さん
イベントや商品の企画を行う。狭山茶を国内外に発信していくブランドの立ち上げなど。
狭山の好きなところ／古谷園の茶畑



市橋 京奈さん
西武文理大学の卒業生。普段はそれぞれテレビ局の職員や在宅医療のアシスタントとして働きながら、イベントの際にキッチンカーでドリンクの販売などを行う。
狭山の好きなところ／静岡県出身なので富士山が見える昭代橋（市橋）、狭山市駅西口のスカイテラスにかかるデッキ（安達）

安達 成美さん

狭山市は現在、社会増する一方で、市内の若年齢層の定住意欲は低く、大学進学や就職に際して若年齢層での転出が多いことも現状の一つとなっています(右図を参照)。



【出典】RESAS（社会増減分析）を基に作成

今、狭山に暮らす皆さんが
いろいろな理由で転出した後にも
「狭山市に関わりたい」と思ってもらえること、
また戻ってきたいと思ってもらえること、
そして新しく転入してきた皆さんにも
狭山を「自分のまちだ」と思ってもらうために、
この特集を組みました。

そのために、まちを知って、好きになって、まちと関わり、その気持ちを誰かにつないでほしい。
それは大げさな話ではなく、誰もが持っている「自分とまちとのつながり」に
目を向けることからまず始まると思っています。
特集内での皆さんの話に耳を傾けて「自分と同じだ」「私にもつながりがある」
「こんな風にまちと関わってみたい」そんな気持ちを感じてもらえたら、最初の一歩。
まちとのつながりに気付くことは「私のまち」と思えることにつながります。
それは裏を返すと、自らが地域にとって意味のある存在だと感じることです。
地域ブランディングなどを専門とする東海大学の河井孝仁教授*は著作の中でこう述べています。
「自らを意味ある存在だと思う人は、あきらかに、自らを幸せだと考えている。」
地域への積極的な関与はもちろん、地域活動に携わる人への感謝の気持ちもまた、
「自らを意味ある存在にし、地域に関わる人々の持続的な幸せを実現していく。」
まちとひとがつながり、ひととひとがつながり、相互的にまちの魅力は高まっていきます。

狭山市がこれからも、皆さんにとっての「暮らしていきたいまち」であるために。

意識をしなくても、特別なことをしなくても、
このまちで暮らすあなたの日常がまちとのつながりです。

私にも、あなたにも。

出典:「シティプロモーション・行政広報を評価する」河井孝仁著(第一法規)
「第5次狭山市総合計画」策定に向けた狭山市民意識調査報告書
*総務省地域力創造アドバイザー、同省地域情報化アドバイザー

LINK SAYAMA ひとがつながるまち
5年度に市民ワークショップ・職員ワーキンググループから生まれた狭山市のブランドメッセージ。ロゴマークは、市への愛着や誇りの醸成を図るために、どなたでも使用することができます。使用方法や規定などの詳細はこちら

(写真の一部は市民カメラマン大橋正裕さん、寺澤俊博さん、横内明人さんの撮影)

問合せ　広報課へ☎2935-3765

窓の外、すぐそばに広がるつながり

このページまで、まちに関わる方々のお話を伺ってきました。会話の中のキーワードから連想される、まちとつながるきっかけを皆さんにもご紹介します。

休みの日、心地の良い場所でのんびりと過ごしたい。今日は天気が良いし、飲み物片手にお散歩でもしようかな



入間川にこにこテラス・公園

入間川沿いのにぎわいスポットや個性豊かな公園が、まちの憩いの場として皆さんをお待ちしています。休日にはイベントが開催されていることも

もぎたての果物が食べたい！季節の味わいを日常のひとときで感じられる幸せ



観光農園

市内にはブドウ、イチゴ、ブルーベリーなどをその場で味わえる農園があります

狭山に暮らして数年経つけど、急須で入れた狭山茶ってどんな味なんだろう。家のすぐ近くにお茶屋さんがあったな



お茶屋さん

茶葉と茶器はもちろん、ティーバッグのお茶や狭山茶を使用したお菓子を売っているところも。茶摘み体験をすることもできます

帰り道で素敵なマーケットを発見。ふらりと立ち寄り、キッチンカーでおいしいご飯やスイーツを買ってほっと一息



マーケット・キッチンカー

狭山市では1年を通してたくさんの種類のマーケットが開催されています。市と防災協定を締結している「さやまキッチンカー協会」では、設備込みのキッチンカーレンタルも行っています

レクやキャンプが好きなこども。そういうことを学べる場所があるらしい



ジュニアリーダー初級講習会

1年を通して月1回ほど活動。募集は例年4月頃。小学5年生～高校3年生が参加できます

元気な野菜やおいしい地のものに囲まれるとわくわくする。近所の農家さんの名前を発見！なんだかうれしくて手に取ってみる



あぐれっしゅげんき村

市内生産者の農産物や旬の野菜などが購入できる直売所。併設のフードコートでも季節の食材の料理を楽しむことができます

まだまだ広がるつながり

特設ページから動画や市勢要覧をご覧ください。